

第22回 第3章 近世社会の形成と庶民文化の展開

江戸時代の経済と産業の発達

執筆・講師
佐伯英志

学習のねらい

江戸時代の江戸・大坂・京都は、多くの人口を擁する巨大都市に成長し、三都と呼ばれた。三都はそれぞれ性格の異なる都市であったが、どのように発展したのだろうか。また、江戸時代には五街道の整備をはじめとした陸上交通や、全国規模の水上交通が発達しただけでなく、農業・漁業・手工業・金融業など、さまざまな産業が発達した。このように、江戸時代に経済と産業が大きく発達したのはなぜなのだろうか。その要因を探ってみよう。

三都の繁栄

江戸は、幕府が置かれた政治的中心都市であった。江戸幕府の3代将軍家光のときに改定された武家諸法度では参勤交代が制度化されたこともあり、江戸には全国から武士が集住するようになった。生産者ではない武士の生活を支えるため、商人や職人も住むようになった。武士と町人の人口を合わせて、約100万人もの人が住んでいた江戸は、同時代の海外の都市と比べても、世界有数の大都市となっていた。

大坂は古来より交通の要衝であったが、江戸時代には諸藩の蔵屋敷が置かれ、商業的中心都市となった。大坂には全国から年貢米や産物が集まり、売りさばかれ、江戸をはじめとしたさまざまなところに出荷された。物資の集散地であり、たくさんのモノとカネが動く場所であったため、「天下の台所」と呼ばれた。

京都は平安京遷都以来の歴史を持ち、朝廷や多くの寺社が存在する伝統都市であった。天皇家や公家の生活や行事、寺院や神社などの宗教を支える道具づくりの文化が栄えた。長い歴史の中で育まれた高度な技術をもつ手工業が発達した、伝統工芸の中心都市であった。

江戸・大坂・京都は、それぞれ性格を異にするが、いずれも全国的な流通の中心として機能する大都市であり、三都と呼ばれた。

交通の発達

近代的な交通手段が確立する以前、大量の物を運ぶ手段は船に頼ることがほとんどであった。そのため、三都を中心とする物資の流通網を、主に支えたのは水上交通であった。なかでも、江戸と大坂を結ぶ海路は特に重要な輸送路であり、菱垣廻船や樽廻船が就航した。また、年貢米を江戸や大坂に運ぶための東廻り航路・西廻り航路が、河村瑞賢によって開かれた。河川交

通を含め、船による流通のネットワークが全国に広がった。

また、江戸時代には陸上交通も発達した。幕府は、全国支配のために五街道をはじめとする主要道路を整備した。それらの道は公用だけでなく、さまざまな人が利用する道となり、宿場や一里塚、関所などが整備された。宿場には、参勤交代等で通る大名などが泊まる本陣・脇本陣のほか、公用の業務を行う問屋場、一般の旅行者が泊まる旅籠などが置かれた。陸上交通の整備にともない、飛脚などの通信機関も発達した。飛脚には、幕府公用の継飛脚や、各藩専用の大名飛脚、民間の町飛脚などがあつた。

このような陸上交通と水上交通の発達により、さまざまな物資や情報が全国規模でやり取りされるようになった。

産業の発達

江戸幕府や諸藩は、生産力を高め、安定化することを図り、農業政策にも力を入れた。新田開発を奨励し、河川の治水や干拓などをおこなった。また、農民も、生産量の増加、作業の効率化、生活の安定化のために、備中鍬や千歯扱、唐箕などの新しい農具を使用するようになった。貨幣経済の浸透とともに、下肥や金肥などの肥料を購入するようにもなった。新しい農業技術を取り入れるために農書も活用された。

漁業や手工業など、農業以外のさまざまな産業も発達した。問屋商人が原料や資金を農家に前貸しして製品を受け取る問屋制家内工業も現れた。

江戸幕府は、大量の金貨・銀貨・銭貨を発行し、貨幣経済も急速に浸透した。それぞれの貨幣は単位が異なっており、金1両=銀50匁(のち60匁)=銭4貫(1貫=1000文)という交換比率が決まっていたが、実際にはその比率は変動していた。それぞれの貨幣を交換する必要が生じ、富裕な商人のなかから両替商も現れ、為替や貸し付けなどの金融業務もおこなった。